

ラテンアメリカ都市物語

＝第 27 回＝

近未来都市

ブラジリア

—その魅力と、発展を支えた日系同胞

齊藤 顕生 (日本アマゾンアルミニウム 監査役)

北国育ちで暑がり、汗っかきの筆者が 30 年ほど前にブラジル赴任の辞令を受け取った時、高温多湿のアマゾン地域のイメージだけが膨れ上がり、不安と期待が入り混じる心境に陥ってしまった。しかし、その後ベロオリゾンテとカンピーナスで暮らすことになり、「ブラジルって暮らしやすい」と印象を変えることになるのだが、2 回目のブラジル赴任で首都ブラジリアでの生活を体験すると、某五輪選手ではないが「気持ちイイ」と口からこぼれ出てしまうほど、ブラジリアの快適な気候に心身ともに癒されることになってしまった。本稿では生活者目線からのブラジリアの魅力と、その発展を支えた日系移民について触れてみたい。

ブラジルの首都ブラジリアは赤道と南回帰線の間、南緯 15 度に位置するが、海岸にあるサルバドールやリオデジャネイロからは直線距離で約 1000km も離れている内陸地域かつ標高 1100m の高原地帯に位置しているため昼夜での寒暖差が大きい一方、四季の区別があまりなく、概ね強い乾季（5 月から 9 月）とスコールが降る雨季（10 月から 4 月）に分かれている。日中の日差しが強く、気温は高くなっても日陰や夜間は涼しく、我が家ではエアコンを使うことがほとんどなかった。それほど過ごしやすい魅力的な気候である。

ブラジリアの魅力は気候だけではない。それはブラジリアへの遷都の理由の一つでもあったのだが、広大な国土のほぼ中心に位置しているため、国内主要都市へは飛行機だと 4 時間以内で行くことができる。これはブラジル各地を出張や旅行する上で大きな利点である。

また、例えば道路インフラはサンパウロやリオデジャネイロなど他都市と比べても格段に整備度合いが高く、これまた「気持ちイイ」のである。例えば空港に到着してタクシーで自宅やオフィスに向かう場合、20km 弱の距離を約 20 分で到着可能だ。もちろん朝夕のラッシュ時は相応に混雑するがサンパウロやリオデジャネイロなど他の大都市の比ではない。その道路だが、空港から中心部までは片側 3 車線の高速道路で結ばれ、それに並行して片側 2 車線の側道も配置しており、基本的に信号なしでインターチェンジを通じて枝道に行けるように設計されている。側道沿いには季節ごとに美しい花を咲かせる街路樹や大木が豊富にあり、車窓から見る緑豊かな風景には心底癒される。

憩いの場も充実している。市内中心部には Parque da Cidade（市民公園）という広大な公園があり、園内には様々なスポーツ施設や遊園地、展示場まである。もちろん、園内にはシュラスコを楽しめるような



写真 1：主翼部分の高速道路（JICA ブラジル事務所・青木一誠氏提供）

サイトも整っている。また、パラノア湖という人工湖の存在も大きい。官庁街や大使館地区の東側に大きく広がるこの湖は、乾燥地帯であるセラード地域にブラジリアの建設を決めてそれを実行したクビチェッキ大統領が、リオデジャネイロの美しい海やビーチへの思いを引きずる官吏達を癒す目的で作ったという噂もある。その真偽は定かではないが、湖畔には瀟洒な住宅やレストラン、スポーツクラブ、ヨットクラブなどが並び市民の憩いの場となっており、クビチェッキ大統領の思惑通りになったと言える。

筆者がブラジリア在住時は、パラノア湖畔に沿って造成された「ブラジリアゴルフクラブ」の月会員となってほぼ毎週末ゴルフに勤しんでいた。このゴルフ場は4ホールが湖に絡んでおり、中でも湖超えのショートホールでは多くのボールを湖底に沈めてしまった。パラノア湖には数多くの動物も棲息しており、中でもカピバラは昼間湖からゴルフ場内へと侵入し堂々とフェアウェイを横切っていくのだが、大概是近づいていくと、静々と離れていく。ただし、マンゴーの季節は別だ。ゴルフ場内にはマンゴーの木もあり、季節になると熟したマンゴーの実が地面にぼたぼたと落ちてくる。その実を目指してカピバラ達が大勢押しかけてくるのだが、夢中になってマンゴーの甘い実を貪り食っている最中はなかなかどいてくれない。この時期にカピバラの群れにボールを打ち込んでしまうとプレー中断を余儀なくされた(注：2021年にカピバラ侵入防止の柵が湖岸に設けられ、残念ながらゴルフ場内でカピバラの姿を見ることは難しくなっている)。

そして、「食」についても全く不自由することはない。新鮮な食料品はもちろん、日本食材についてもサンパウロで購入する必要などなかった。特に、週末のセアザ(CEASA：中央卸売市場)での一般向けの土曜市は、新鮮な野菜、果物、肉、乳製品などの直売店が数多くあり、とてもわくわくする場所だ。セアザでは特に日系人の経営する八百屋さんやコーヒー豆の販売店が人気であった。このブラジリアの「食」を支える日系人の存在に関しては後程述べることとする。

ブラジリアは1987年に世界文化遺産に登録された。その建設に至る歴史的背景や都市計画の中身、オスカー・ニーマイヤーの設計による各種建造物に関しては、在ブラジル日本国大使館のウェブサイト

をはじめとして数多くの文献で紹介されているのでここでは割愛するが、近未来都市と称されるブラジリアは、独特なデザインの建造物と共に前段までに述べたブラジリアの街としての魅力を引き出す都市計画にある。

写真3はブラジリアの中心部の地図である。右側が北、左側が南を指している。ご覧のように飛行機の翼を広げた格好となっており、翼の両端を結ぶ道路は約20km、機首から尾翼までの直線道路は約10kmもある。機首部分には国会(立法)、最高裁判所(司法)、大統領府(行政)に囲まれた三権広場があり、胴体部分に少し移動すると外務省など各省庁ビルが続き、大聖堂(カテドラル)、国立劇場などが翼との接点近くに配置されている。空港は街の南側となる右主翼の先の方で枠外にある。胴体と翼が交差する場所にはバスターミナル、地下鉄駅などがあり、尾翼の方



写真2：ゴルフ場を横切るカピバラの群れ(筆者撮影)



写真3：ブラジリア中心部の地図(筆者撮影)

に少し進むとテレビ塔がある。胴体のこの辺りの中央分離帯は横幅が相当広く、およそ400mにもなる。Parque da Cidadeを左手に見つつ、更に尾翼方向に進むと、ブラジリア中心部で一番標高が高い地点に到達し、そこにはクビチェッキ大統領のモニュメントがある。ちなみに、クビチェッキ大統領はJK（ポルトガル語の発音では、「ジヨタ・カー」という愛称で呼ばれるが、ジュセリーノ・クビチェッキ・デ・オリヴェイラ（Juscelino Kubitschek de Oliveira）の頭文字であるJとKから取ったものである。なお、日本語の文献にはクビチェックと書かれていることが多いが、ここはあえてブラジル・ポルトガル語の発音に従って、クビチェッキと表記させていただく。JKモニュメントの前には大統領と夫人の像が、ブラジルの政治、行政、司法を見守っている。ブラジリアでの筆者の自宅は尾翼と右主翼の先を結んだ中間点辺りのエリアにあり、毎朝自家用車で尾翼近くから左主翼の付け根辺りのオフィスまで通勤していたが、約7kmの道のりをラッシュ時でも20分弱ほどの所要時間であった。この胴体部分は片側6車線で信号も疎らなので、通勤時の混雑といっても確実に車の流れはあった。繰り返しとなるがブラジリア中心部の道路整備状況に快感すら覚えるのは、車の流れを極力止めない設計にあるのだと思う。

首都ブラジリアの人口は現在約300万人で、サンパウロ、リオデジャネイロに続きブラジル第3位の人口規模を有する大都市に成長している。1960年の遷都に向けて1956年から急ピッチで首都建設が始まったわけだが、未開の大地での大規模都市開発には大量の資材と労働者が必要であった。労働者は全国各地から集められたが、特にバイーア州をはじめとす



写真4：JKモニュメント（筆者撮影）

る東北ブラジルからより多く集められたと聞いている。周辺には親戚が東北ブラジルにいるという人が多かった印象があるのは、そのためかもしれない。

首都建設の歴史は『ブラジリア日系入植50周年』誌（2008年発刊、以下『入植50年史』）にも記されており、「そこでは誰もが一番になろうとしていた。例えばブラジリア最初のホテル、最初のバー、最初の薬局、最初の新聞、というように男たちはパイオニア精神で一杯だった」との記載がある。まさに、大農場しかなくインフラとは無縁の地での首都建設にはビジネスチャンスが転がっていて、首都建設に直接携わる関係者や建設労働者以外にも、パイオニア精神溢れる人材が数多く集まってきていた当時の熱狂が伝わってくる。筆者はブラジリア日本語モデル校理事長の矢田正江氏から、次のように当時の様子を伺ったので紹介する。「ブラジリアは建設景気で沸き何を作っても売れたと聞いている。農業のみならず、建設や運輸分野で成功した日系人も多い。実姉のご主人（日系二世）は建設会社に砂や石を販売して大成功した。また、ブラジリアでバス会社を営んでいた日系人の一族は、当時ブラジリア建設に携わる労働者を宿舎から工事現場へ運ぶ仕事がきっかけで大成功した」。

クビチェッキ大統領率いる当時の連邦政府は、首都建設を成功させることはもちろん、肝心なのはそこに人口を定着させることであり、特に首都周辺での食糧の安定供給は都市人口を維持、拡大するためには極めて重要と認識していたようである。そして、クビチェッキ大統領から農地開発を強く要請され入植を始めたのが日系移民であった。

『入植50年史』によると、首都建設が始まるのとはほぼ同時期となる1957年1月にブラジリア近郊での日系農家の入植が始まっているが、誰もが入植できたわけではなくINIC（移民・植民地国家院〔当時〕）による技能面での厳正な審査を経た上で入植者が決められた。また、1957年当時のブラジルにおける日系人のイメージは終戦後わずか12年であったが既に勤勉実直で忍耐力があり子女教育にも熱心というプラスのイメージで捉えられていたようである。それがクビチェッキ大統領をして入植を要請せしめた大きな要因だったらしい。ブラジリアへの持続的な食糧供給を実現するため、当時の政府は入植者には土地を分譲するのではなくあえて賃貸する政策を取っていた。それは、資本力はなくとも適切な技術力を



写真5：セアザ（筆者撮影）

持つ農業従事者を重視していたためであり、結果的に日系移民はそのようなプロフィールに合致していたらしい。

筆者は、1960年にブラジリア近郊（空港から約15km）のバルゼン・ボニータ（Vargem Bonita）移住地に入植した日本人移住者である新保芳則氏から次のように当時の様子を伺ったので紹介する。なお、新保氏はトマトやピーマンなどの生産者として成功し、2010年5月17日付『日本経済新聞』でも紹介されている。「初めは日本からバイーア州に入植したが、日系の産業組合がバルゼン・ボニータへの入植者を募集していて応募したのをきっかけにブラジリアに移転した。合計6家族が政府から無償で土地を貸与されて入植した。未開地だったが森林はなく、低木と雑草が広がっている湿地であり、割と開拓しやすい土地であった。ヌークレオ・バンデイランチ（Núcleo

Bandeirante：ブラジリア近郊で首都建設のために作られた町）にも近く、ロケーションとしては恵まれていた。入植後は政府事務所に栽培する作物を報告し、肥料などを無償でいただいていた。ブラジル政府の厚い支援があった反面、現在も土地は借地であり政府には農家への土地売却の意向はない。もう少しブラジリアから離れた入植地であるブラスランジア（Brazlandia：空港から約40kmで花卉栽培やイチゴ栽培で有名）や、タグアチンガ（Taguatinga：空港から20kmで都市化が進んでいる）などの場合は、土地が入植者に払い下げられたと聞いている」。

新保氏の話は『入植50年史』の記述内容を裏付けるものであり、クビチェッキ大統領の日系農業従事者に対する信頼の厚さが窺われる。

以上ブラジリアの発展を支えた日系移民の存在と、ブラジリアの魅力を生活者の目線で綴ってきたが、筆者の表現力では残念ながらその魅力を十分に伝えきれてはいないと思う。しかし、数日ブラジリアに滞在して、オスカー・ニーマイヤーの作品群に触れ、パラノア湖畔で食事と憩いの時を過ごし、週末であればセアザで新鮮な食材達に囲まれ、ストレスフリーの幹線道路を駆け抜け、広大なセラードの大地に沈む夕陽を眺めたなら、皆さんはきっと「気持ちイイ」という台詞を吐かずにはいられなくなることを確信している。

（さいとう あきお 日本アマゾンアルミニウム株式会社 監査役）

ラテンアメリカ参考図書案内



『ブラジル史《YAMAKAWA Selection》』

山田 睦男・鈴木 茂編 山川出版社
2022年10月 228頁 1,300円+税 ISBN978-4-634-42391-6

植民地時代、帝政期、20世紀前半、第二次世界大戦後は1995年の日本ブラジル修交100周年と96年のカルドージ大統領の国賓としての訪日、90年の入管法改正以降の日系ブラジル人の出稼ぎ増加までのブラジルの歴史であった旧版に、今回新たに「21世紀のブラジル」の章が付け加えられ、労働者党（PT）政権の登場、ルセーフPT政権の退場に至るまでを簡明に紹介している。2003年のルーラPT政権の発足を、それに続くアルゼンチンのキルチネル、ボリビアのエボ・モラエス等の左派の大統領当選とともに「ピンクの波」の一環として、ルセーフ大統領弾劾後に大統領代行に就いたテメル政権とボルソナーロの大統領当選を「ピンクの波」の終焉として捉えている。

本書は2000年に刊行された『新版 世界各国史』のラテン・アメリカ史Ⅱのブラジル部分（山田睦男元国立民族学博物館教授執筆）を、鈴木茂東京外語大名誉教授が加筆修正し共著としたもの。コンパクトに簡明にまとまったブラジル通史。

（桜井 敏浩）